九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

否定文とDiscourse Context

河上，誓作

https://doi.org/10.15017/2332713

出版情報：文學研究. 74, pp.17-33, 1977-03-30. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

否定文と Discourse Context

河　上　誓　作

1. 否定文の意味論的分析
2. 否定と否定文
3. 否定文と Discourse Context
4. Katz による否定文の分析
5. 結論

1. 否定文の意味論的分析

まず否定についての古典的議論として知られる Frege(1252)の考察を引用してみよう．Frege は判断 (Judgment) に否定的判断と肯定的判断の2種を区別すべきかどうかという議論の中で次のように述べている．

(1) What is more, it is by no means easy to state what is a negative judgment (thought). Consider the sentences 'Christ is immortal,' 'Christ lives for ever,' 'Christ is not immortal,' 'Christ is mortal,' 'Christ does not live for ever.' Now which of the thoughts we have here is affirmative, which negative? (p.125)

つまり判断に2種を区別することはできないということである．Frege は更に進めて，もし2種を区別することになれば，(1) affirmative assertion (2) negative assertion (3) a negative word の3つのカテゴリーを必要とすることになるのに対し，逆に2種を区別しなければ (1) assertion (2) a negative word の2つのカテゴリーで充分であり，論理的・言語的経済の観点からするとより簡潔であるという利点を指摘している．

言語学的なレベルでの「否定」に関心をもつわれわれが，より深層的なレベルである「判断」の議論に，これ以上たちいるつもりは毛頭ない．しかし言語学的なレベルとの係り合いから Frege からの引用に関連して少くとも次の２点をここで明確にしておかなければならない．まず，(A) 否定的判断と肯定的判断の区別は存在しないとしても，言語表現のレベルでは，否定文と肯定文の区別は存在するのではないかという点，更に (B)引用文中の５つの文に関して否定文と肯定文の差異はどこにあるのか，そもそも否定文とは何かという点，以上の２点についてである．本稿を進めるにあたっては，まずこれらの問題を煮つめておく必要があろう．なお筆者の考えを述べる前に，意味論的考察の代表として，Frege の理論を受け継ぎ内包的意味論を提唱する Katz の否定概念について少し検討を加えておきたい．

Katz の否定に関する立場は，およそ次の３点にまとめられるであろう．まず上の(１)についての Katz の立場は，肯定的，否定的命題の区別は排除するが，肯定文，否定文の存在は否定しないとするものである．つまり Katz は肯定文・否定文の区別を認めている．[①] 第２点として，多くの哲学者・論理学者は logical vocabulary と extra-logical (*or* descriptive) vocabulary の区別をたてて，否定を logical vocabulary の一特徴にすぎないとするのであるが，これに対し Katz は extra-logical terms も logical terms と全く同じように文の logical form に貢献することができると主張し，両者の区別を排除しようとする立場をとる．例えば次の例で各組の (b)，(c) 文はそれぞれ (a) 文の否定であり，同じく各組の (a)文はそれぞれ(b)，(c)文の否定である．さらに(c)文はlogical term は持たないのに(b)文と同意である．[②]

(2) (a) Christ lives forever
(b) Christ does not live foreuer
(c) Christ is mortal

(3) (a) The design of the robot is perfect
(b) The design of the robot is not perfect
(c) The design of the robot is flawed

こうした現象を包括的に取扱うために Katz はいわゆる "antonymy operator" の概念を導入する．第3点として，普通哲学者や論理学者による否定概念は，偽の陳述の否定は真であり，真の陳述の否定は偽である，という条件のみを満足させればよいのであるが，Katzは否定概念としてこの条件に加えて更に別の条件，すなわち「文 S_1の否定の読み(=Sj)は Sj と同意のすべての文と同じ意味解釈をもつものとして表わされなければならない」という条件，具体的には(2)，(3)の(b)の読みと(c)の読みがidentical でなければならない という読みの条件を新たに付け加えている．これは Katz の合成的意味論 (compositional semantics) の枠組に否定文を包括するためには是非必要な条件なのである．

以上の3点から明らかになる Katz の否定の概念を上に述べた(A)，(B)の観点から再検討してみると，まず，すでに第2点で述べた通り，Katz によれば(a)文の否定は(b)・(c)文であり，更に(b)・(c)文の否定は(a)文である．この考え方が意味していることは，「否定」とは特定の文に内在する固有の概念ではなくて一定の条件を満たした文相互間に存在する incompatibility relation (または antonymic relation)，すなわち文相互間に存在する意味論的矛盾関係，ということになろう．否定に対応する「肯定」に関しては Katz は特に説明を加えていないが，或る文をそのまま認めるという意味での肯定であるなら(a)文の肯定は(a)文，(b)文の肯定は 'not' があっても(b)文，(c)文の肯定は(c)文ということになろう．そうではなくて或る文がすでに否定文であり，それに対応する肯定文という意味での肯定なら，(a)文の肯定は(b)・(c)文となるはずであるが，しかしこの場合は結果が上の否定の概念を適用した場合と全く同じになり，しかも形の上では否定＝肯定という論理が成りたつかに見えるのですこぶる具合が悪い．

ところで否定を2つ以上の文相互間の意味論的矛盾関係としてとらえるこの Katz の立場を更に押し進めていくと，或る文が否定文であるか否かを決定する際，否定辞の存在によって識別するという方法は放棄される結果になってしまう．すなわち上述の第1点から明らかなように，Katz は 'not' のごとき logical terms と 'flawed' のごとき extra-logical terms とを区別しないために，'not' の存在が否定文を識別するための必要十分条件にはなりえないのである．それ故 Katz の考え方に従うと，「否定」のみならず「否定文」に関しても，(a)文の否定文は(b)・(c)文，(b)・(c)文の否定文は(a)文という具合に相対的な言い方でしか否定文を定義できないことになる．更にこの場合，'not' をもつ(b)文の否定文が 'not' をもたない(a)文であるという，すこぶる奇妙な結果を生ずるのである．

以上から明らかな通り，Katz の意味論では否定は2つ以上の文相互間の意味論的矛盾関係としてとらえられ，しかも(a)文の否定は(b)・(c)文，(b)・(c)文の否定は(a)文という具合に，そこでは意味的「相互」関係が優先されている．特に compositional semantics との整合性という観点からは，否定概念をこのようにとらえることは望ましいことであろう．しかし，この立場から「否定文」を定義するとなると，上に見てきたようにおかしな結果を生じてしまう．こう見てくると，概して「否定」の概念は意味論的に定義できても，「否定文」となると意味論的には処理しきれず，どうしても具体的な discourse context に依存しなければならない部分が生じてくるといえそうである．この点については次節で詳しく述べたいが，とにかくこのあたりに Katz の意味論的分析の限界と，Katz が「否定文」の存在は認めながらもそれに対して明確な規定を与えていない理由が存在するように思われる．

2. 否定と否定文

この節では「否定の概念」と「否定文とは何か」について筆者の考えを

述べてみたいと思う．まず「否定」・「肯定」という言葉はいずれも共通して「二次的」という本質的特徴をもっている．どういう意味において二次的かというと，いずれの言葉も一次的に存在する対象もしくは言語表現を想定した上で用いられる言葉であるからである．すなわち「否定する」という言葉が正常に機能するためには，かならず否定されるべき対象もしくは言語表現が想定されていなければならず，また同様に「肯定する」という言葉が正常に機能するためには，かならず肯定されるべき対象または言語表現が想定されていなければならないのである．つまり，「否定」とか「肯定」という概念は，一次的なものをかならず想定した上でそれに対して二次的に機能する概念であるということである．

さて，この考え方を更に推し進めると，一次的なものと二次的なものとの間に存在論的な前後関係が介在することが明らかになる．すなわち，この考え方でいくと，一次的なものはかならず二次的なものに時間的・存在論的に先行しなければならないという制約があることになる．これはどういうことかというと，例えば「Aの否定はBである」というとき，AとBとの存在論的関係はすでに contextually に明確に定っていることを意味する．それ故，「Aの否定はBである」は決して「Bの否定はAである」と相等ではありえない，以下，便宜上「否定」にマトを絞って議論を進めていくことにしよう．

このように「否定」を一定のコンテクストで固定された一次的なものに対する二次的機能として位置づけるやり方に従うと，当然のことながら先に述べた Katz の意味論における分析とは異った結果を導く．すなわち Katz の意味論は，コンテクストを排除した上での文間の意味論的矛盾関係から「否定」を定義しているので，「Aの否定はBである」と「Bの否定はAである」とを比べた場合，ともに意味論的には同じ読みが与えられることになる．この点が前節で述べられた「否定」の概念とcontextual な定義との最大の相違点である．

「否定」の概念についてはこれくらいにして，次に否定の contextual な

定義に基づく「否定文」の定義にうつろう．「Aの否定文はBである」というとき，AとBにはどのような制約が存在するであろうか．第一にAとBはともに言語表現であることが必要である．第2に，Aはcontextuallyに一次的である必要がある．第3に，BがAの否定文であるためには，BはAの全部または一部分を二次的に否定する 'not' またはそれに類する否定辞を含まねばならない．この第3の条件が満たされない場合は，(a) Christ lives forever を一次的要素を含む文とする場合，(c) Christ is mortal をその否定文として許すことになってしまう．筆者の考えでは，(c)は Christ の mortality に対する一次的 assertion としての性格が強いと判断すべきで，やはり(a)に対しては(b) Christ does not live forever をその否定文とすべきである．「否定文」を以上の3点から規定すると，このように規定された否定文は，常に具体的コンテクストの中でしかとらえられないことになる．厳密にいえば，'not' を含む(b)のような文でも単独では否定文ではなく，具体的な discourse context かまたは適切な一次的コンテクストを想定することによってはじめて二次的なものとしての否定文の機能が明らかになるのである．

これまで「一次的」という言葉を用いてきたが，一次的表現がどのような特徴をもつものであるかについては，明示的な説明を避けてきた．これまでの考察から明らかな通り，一次的なものは常に時間的・存在論的制約を受け，二次的な機能が成立するための下地とならなければならない．この関係を情報という観点からいえば，一次的なものは二次的機能が正常に働くための先行情報ということになる．つまり「否定する」という二次的機能は，一次的な先行情報に作用することによって新たに新情報を作り出す役目を果たす．こうみてくると「一次的」表現のもつ最も核心的な特徴は，[+definite] ということになろう．もしこれが正しければ，「否定は一次的なものに作用する二次的な機能」といういい方は，「否定は definite なものに作用する二次的な機能」といいかえることができる．もちろんこの definite なものは，特定のまたは想定された discourse context に

おいて規定されるものでなければならない.

3. 否定文と Discourse Context

本稿のこれまでの考察によると，否定文とは「具体的な discourse context またはそのように想定された context にあって，一次的な表現（すなわち［+definite］の特徴をもつ表現）に対して 'not' またはそれに類する否定辞により二次的作用を受けた文」ということになる．しかしこの定義は実際の言語分析の場合効力を発揮できるであろうか．この節では，具体的な英語の否定現象をとりあげ，コンテクストに制約された否定文の概念が意味論的な否定文の概念に比べ一層の説明力をもつことを示してみたい．

まず Givòn (1975) の文章英語の調査によると，'active-declarative-affirmative-main clauses' においては，'accusative object nouns' の約50%が 'referentially indefinite'（指示的に不定）であると報告されている．③ ここで注目すべきことは，英語では accusative object の位置が，指示的名詞 (referential noun) を discourse の中に indefinite なものとして導入する際の最も重要な環境であるということである．ところでこの約50%という分布は，否定を伴う動詞に続く accusative object の場合，すなわち否定文の場合には，著るしく変化する．Givòn によれば，2つの小説で数えられた referential objects（指示的目的語）のうち100%が referentially definite であり，referentially indefinite なものは1つもなく，また indefinite なものはあってもそれらは全て 'non-referential' であったと報告されている．これまでの考察から容易に想像されるように，否定文においては目的語は100% 'referentially definite' であるということは，本稿の言い方をすれば，一次的で definite な要素に対して否定辞が二次的に作用しているということに他ならない．Givòn のこの報告は，否定の本質は 'Contextual' であることを示したいい実例である．具体的なコンテクストを考慮しない意味論的分析では，この現象を説

明することはむづかしいであろう．

否定文の contextual な概念を支持する第2の例は，次のような文の解釈に関してである．

（4） ? A man didn't come into my office yesterday

（5） ? The man you didn't meet yesterday is a crook

疑問符号(?)があるのは，(4)・(5)の文はいずれも少しおかしな文であることを示す．ただしこれには少くとも2つの注釈が要る．すなわち，（イ）いずれの文も competence grammar または意味論的判断に従えば'?'である．(ロ)ただし適当なコンテクストを与えればいずれの文もおかしくない．(イ)の立場からいえば，いずれの文も具体的なコンテクストから遮断されたものとして取扱われ，しかもそれぞれの文だけから 'not' が何を否定しているかを理解しなければならない．それ故，(4)「（ある一人の）男が昨日私のオフィスに来なかった」，(5)「あなたが昨日会わなかった男は，……」などのコンテキスト抜きの解釈がまず生まれ，それぞれの解釈をこんどは日常の生活経験に直観的に照らし合わせてみて，(4)なら「(ある一人の)男が昨日私のオフィスにやって来た」というのが確率的に普通のいい方であり，また(5)なら「あなたが昨日会った男は，…」の方がより普通のいい方であることから，それぞれの文が確率的に普通のいい方ではないという意味で'?'が付加されたものと考えられる．しかし実際の言語生活でこれらの文が用いられる場合は，上述の（ロ）が示すように，(4)も(5)も normal な文として通用するわけで，この事実を説明しきれない点に（イ）の立場の弱点がある．ところが本稿の否定文の概念に従えば，そもそも否定文はコンテクストから遮断できないものであり，それ故(4)や(5)を孤立させて解釈することは無意味なのである．従って(4)と(5)の解釈にあたっては，具体的なコンテクストをまず与えなければならない．それが本来の否定文の在り方であるからである．このように考えれば，(4)と(5)の文が'?'をつけられることは，最初から避けられるはずである．(4)の文は，'All the men except one came into my

office yesterday' という既知情報を背景とするようなコンテクストにおいてのみ本来用いられるべき文であり，更に(5)の文は，'Yesterday you met all the men except one' で表わされる情報が明らかであるようなコンテクストにおいてのみ用いられるべき文であろう．

否定文は discourse context から遮断されてはならないとする立場を支持する第3の現象は次のような文における否定の scope（作用域）に関してである．

(6) He did not run as fast as he could④

(7) The man is not a trustworthy congressman⑤

(6)において否定辞 'not' の作用域は 'as fast as he could' である．その理由は次の含意関係の事実から明らかにされよう．

(8) He ran as fast as he could ⊃ He ran

(9) He did not run as fast as he could

$$\begin{cases} \supset \text{He ran} \\ \not\supset \text{He did not run} \end{cases}$$

すなわち，discourse への新情報の導入順序という観点から(6)・(7)を観察してみると，まず discourse の α 段階（(10)を参照のこと）において一次的なもの（definite な先行情報）として，'He ran' があり，それに対して新情報の修飾語句 'as fast as he could' が二次的に作用し，'He ran as fast as he could' が生じると考える．（もしここで修飾語句の代りに 'not' が二次的に作用すれば，'He did not ran' となるはずである．）discourse の次の段階，すなわち($\alpha+1$)段階では，形式的には 'He ran as fast as he could' 全体が一次的な要素をなすかにみえるが，すでにみてきたように実際にはこの文の内部自体にも部分的に新・旧情報の区別が存在する．そこで結論的にいうと，($\alpha+1$)段階での 'not' の作用域は，α段階における二次的要素，つまりα段階の新情報だけであって，α段階の一次的要素は($\alpha+1$)段階では情報的にはいわば固定的なものと化してしまう．すなわち，α 段階の二次的要素だけが($\alpha+1$)段階では新たな

一次的要素となり，‘not’ の二次的作用を受けるのである．

(10)

α段階
- He ran
  一次的要素（旧情報）
- He ran as fast as he could
  二次的要素（新情報）

⇓

(α＋1) 段階
- He ran as fast as he could
  一次的要素（旧情報）
- He didn't run as fast as he coulcl
  二次的要素

新・旧情報をいわば ‘primitives’ としてとらえ，それでもって discourse を分解していくと，具体的な discourse は新・旧情報の交代として表わすことができるであろう．このように仮定されたメカニズムの中に，否定文の論理もぴったりとはまりこむというのが筆者の見解である．

なおここで，α 段階の一次的要素について２つの点を補足説明しておかなければならない．まず上の説明で一次的要素は(α＋１) 段階ではいわば情報的に「固定的なもの」と化してしまうと述べたが，この要素がいわゆる伝統的に ‘presupposition’ と呼ばれてきたもので，説明からもわかる通り，否定が internal negation である限り，否定辞 ‘not’ との係り合いは全くない．このことは，次の Horn (1969)，Morgan (1969) らのpre-supposition の定義からも明らかである．⑥

(11) S_1 presupposes S_2 = df S_1 entails S_2 and
S_1's denial entails S_2

‘S_1's denial entails S_2’ の具体例としては，(９)に挙げた含意関係で十分であろう．

α 段階の一次的要素について補足すべき第２点は．(α＋１)段階の否定辞が external negation として機能した場合のことである．Böer and Lycan (1976)の報告によると，⑦ external negation が普通の context

で用いられる場合はまれであり，用いられたとしても good English ではなく，それ故この概念は 'logician's claptrap' にすぎないという意見もあることが報告されている．internal negation と違う点は，external negation の場合($\alpha+1$)段階の否定辞の作用域がα段階の一次的・二次的要素の全てに及ぶ点である．これを 'presupposition' という言葉を用いて言い換えれば，external negation は presupposition をも含めて否定してしまうということである．⑧これは discourse 全体の流れからみると，

$$\cdots\alpha-2,\ \alpha-1,\ \alpha,\ \alpha+1,\ \alpha+2\cdots$$

のように段階的に流れている discourse において，突如としてα段階の全てが（$\alpha+1$）段階で否定されることを意味する．もしこの種の否定がA，B二人の間の会話の流れにおいて生じたと仮定すると，その表現は相手の表現を根底から否定したことになり，その結果会話における協調の原則が破られるわけで，ややもすると会話の断絶につながる可能性をもつことになる．external negation が good English でないというのは，こうした会話の原則に関係した部分があるからかもしれない．また，もしこれが小説の記述文の中で生じた場合は，例えば読者が作家の意図なり表現を誤解しそうだと作家が予測したとき，作家が先まわりしてその予測を打ち消すような場合が考えられるであろう．いずれにせよ external negation の場合は，($\alpha+1$)段階がα段階全体を一次的要素とみたて，それに二次的に否定辞が機能することになる．

以上で補足説明を終り，(7)の説明に戻ろう．例文(7)においても 'not' の作用域は 'trustworthy' だけであるが，この現象も(6)の場合と同じ

(12)

α段階 {
The man is a $\underbrace{\text{congressman}}_{\text{一次的}}$
The man is a $\underbrace{\text{trustworthy}}_{\text{二次的}}$ $\underline{\text{congressman}}$

⇓

$$(\alpha+1)\text{ 段階}\begin{cases}\text{The man is a } \underbrace{\text{trustworthy}}_{\text{一次的}} \text{ congressman}\\ \text{The man is } \underbrace{\text{not a trustworthy}}_{\text{二次的}} \text{ congressman}\end{cases}$$

論理で説明できる．α 段階の二次的要素（新情報）が($\alpha+1$）段階では一次的要素（旧情報）に変り，それに対して否定辞が二次的に作用する．これと平行して α段階の一次的要素は，($\alpha+1$）段階では既知情報として固定化され(いわゆる Presupposition)，'not' の作用域からは除外される．

以上本節では，否定文を discourse における一次的要素への 'not' による二次的作用としてとらえる考え方が，英語の否定表現の説明には有効である，ということを3つの具体例を示して考察した．⑪

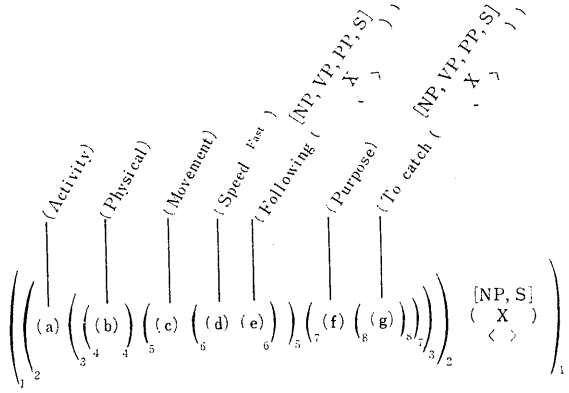
4. Katz による否定文の分析

Katz は *Semantic Theory* (p.168) の中で 意味論の立場から(13)に示された文の意味解釈を試みているが，この節ではこの分析の弱点を指摘し，それの修正案について考えてみたい．

(13) John is not chasing Bill

Katz によれば，動詞 'chase' の読みはおよそ次のような形で表わされうる．⑨

(14)



Katz による(13)の意味解釈に従うと，'not' の作用域は専ら 'chase' の内部に限られていて，その結果(13)の読みはおよそ(16)のようになる．なおここで(14)に対する antonymic operator の作用原則は次の(15)に与えられた公式に従っている．

(15) a. A/((d)(e)) = (A/(d)∨A/(e))

［すなわち，((d)(e))の否定は A/(d) か又は A/(e)］

b. A/((Mi)((Mj))) = (A/(Mi)∨((Mi)(A/(Mj))))

(16) The reading of (4.101) that results from this application represents the truth conditions of the proposition expressed by (4.101) as follows: either John is not engaged in an activity at the specified time and place or, if he is, then that activity is not physical, movement, and purposeful, or, if it is, then either the movement is not both fast and following (of Bill) or the purpose of the activity is something other than to catch Bill. ［(4.101) = (13)］

この読みに従うと，(13) の 'not' の作用域は専ら 'chase' に限られ，その結果 (13)の読みは (14)の semantic markers の組み合わせの少くともどれかひと組が偽であるといういい方でしか表わされないことになる．それ故，Katz の分析は次の 2 点で限界がある．すなわち，(イ) 本来否定文は contextual なものであるにも拘らずコンテクストを抜きにした意味論的解釈にとどまっている点，(ロ) 従って，'not' の作用域が 'chase' に限られコンテクストを考慮したときの読みが切り捨てられている点，である．

筆者の解釈によれば，コンテクストを考慮に入れると(13)の文は論理的には少くとも 6 つの場合の読みが考えられる．⑩

(17) a. John is not chasing Bill, but John is chasing *Tom*

b. John is not chasing Bill, but John is *running with* Bill

c. John is not chasing Bill, but *Tom* is chasing Bill

d. John is not chasing Bill, but *Tom* is *running with* Bill

e. John is not chasing Bill, but *Tom* is chasing *Robert*

f. John is not chasing Bill, but John is *running with Tom*

(17) の各文の前半において，後半のイタリック体に相当する部分が，否定辞'not' の作用域，すなわち一次的要素，であることを示している．これらのうちいくつかは performace レベルでは少し無理な解釈かもしれないが，しかしここで大事なことは，上述の Katz の分析ではこれらのうちの(17b)の読みしか与えられていないことである．そこで以下では，コンテクストを考慮したこれら6つの読みを総合的に記述できる方法について簡潔に述べてみたい．次の(18)は，(17a)－(17f)の6つのコンテクストにおける 'not' の作用域の違いまたは 'not' が作用する一次的要素を明示したものである．ここで 'John is chasing Bill' は便宜上論理構造を用いて chase (John, Bill) として表わし，進行形を表わす部分は省略してある．A/…はKatzにならって否定を意味する．下線のない部分が 'not' の作用する一次的要素，下線のある要素はすでに固定化された既知情報，すなわち presupposition に相当する部分である．なお(17a)－(17f)はそれぞれ(18a)－(18f)に対応している．

(18) a. A/{chase (John, Bill)}＝chase (John, A/Bill)

b. A/{chase (John, Bill)}＝A/chase (John, Bill)

c. A/{chase (John, Bill)}＝chase (A/John, Bill)

d. A/{chase (John, Bill)}＝A/chase (A/John, Bill)

e. A/{chase (John, Bill}＝chase (A/John, A/Bill)

f. A/{chase (John, Bill)}＝A/chase (John, A/Bill)

言うまでもなく(18)の右辺で，A/…の形式で表わされている部分だけが一次的要素であり 'not' が二次的に作用する．また，A/chase のある場合，すなわち(18b)，(18d)，(18f)，だけが Katz の分析による 'chase' の意味構造(14)の否定に関係する場合で，その読みは(16)に与えられた通りである．

以上の規定から(18a)の解釈はおよそ次の通りである．左辺は {John is

chasing Bill}に否定がかかっていることを示すが，しかし John と chase は下線が引かれているのですでに既知情報（すなわち presupposition に相当するもの）となっていて，否定辞の作用域の外にある．下線のないのは Bill だけなのでこれが一次的要素であることがわかる．右辺は左辺の情報にもとづいてなされたこの文の解釈であるが，Bill だけにA/…がかかり，その他のものは否定の scope の外にあることが示されている．それ故(18a)の解釈は「John が追っかけているのは Bill ではない」にほぼ相当する．なお，右辺にA/…の形式が2個ある構造(すなわち18d，18e 18f）の解釈では，2個が *or* の関係ではなくて *and* の関係である点を注意しなければならない．例えば(18d)の解釈は，「Bill にに対して或る人が或ることをしているが，それは John がしているのではなく，かつまた chase という行為でもない」にほぼ相当するものである．ただしA/chase の場合(14)の semantic markers の少くともいずれかひと組だけが偽であれば成立するのは，先にみた通りである．

この節の結論として筆者が述べたいことは，否定文はコンテクストと切り離せないから，(18)のような分析をした上で(14)のような意味論的分析と総合し，文の読みを決めるべきだということである．

5. 結　論

本稿では，英語の否定文に関して主に次の3点に要約されるような内容について4節にわたって議論を進めてきた．まず，「否定」とか「否定文」という概念は具体的な discourse context から切り離して取り扱うことはできないこと．第2に，それ故具体的なコンテクストを考慮しない意味論的分析では否定文を取り扱う際その限界が生ずること．第3に，「否定文」をコンテクストから切り離せないものと理解すれば，意味論的に説明のできないいくつかの現象の説明が可能になること，等である．

本稿で取り挙げられなかった否定文の側面および否定に関する語用論的側面全般については取り組むべき問題が山程残っている．これらの点につ

いては稿を改めて検討していきたいと思っている.

註

① Katz (1972) , p.157

② 例文は Katz (1972), p.158から借用

③ Givòn (1975), p.A 8

④ この例文は Givòn (1975), p.B10より借用

⑤ この例文は Katz (1972), p.164より借用

⑥ しかしながら Presupposition とは何かについては様々な議論がある. この問題は本稿の範囲とは直接関係がないのでこれ以上立ち入らない.

⑦ Böer and Lycan (1976), p.77

⑧ (6)の文を external negation として解釈するのは不可能であろう. ここでは It is not the case that he ran as fast as he could の場合の 'not' のかかり具合について考えている.

⑨ Katz (1972), p.165 (14)について Katz は次のように説明している.

The parenthesization marked"2"indicates that the individual(s)referred to by the reading that is the value of the categorized variable '$\underset{\langle\ \rangle}{\overset{[NP,S]}{X}}$' engages in an activity. The parenthesization marked "3,"which has the parenthesizations marked "4," "5," and "7" as components, indicates that this activity is physical, involves movement, and is purposeful. The parenthesizations marked"5"and"6" indicate that the movement involved is fast and is guided in its course by the trajectory of the object(s) chased. The parenthesizations marked "7" and "8" indicate that the purpose of the activity is to catch the individual(s) being followed,i.e., what is referred to by the value of '$\underset{\langle\ \rangle}{\overset{[NP,\ VP,\ PP,\ S]}{X}}$'

⑩ ここでは, external negation の読みは排除する.

⑪ この考え方は否定辞の作用域の違いから生ずるあいまい文の分析に特に有効であることに最近気付いたが、この点については稿を改めて議論したい。

参 考 文 献

Boër, S.E., and W.G. Lycan (1976) , "The Myth of Semantic Presupposition", Reproduced by the Indiana Linguistics Club

Geach, P., and M. Black, eds. (1952), *Translations from the Philosophical Writings of Gottlob Frege*. Oxford: Basil Blackwell & Mott.

Givön, T. (1975), "Negation in Language: Pragmatics, Function, Ontology, "in *Pragmatics Microfiche*, Vol, 1, Fiche 2.

Katz, J.J. (1972), *Semantic Theory*. Harper Internationl Edition: Harper & Row, Publishers.

(September 1976)